

白雲ただよう青空のオランダより...

June 2010 No 8

# Newsletter Circle of Storytelling

語りの輪 ニュースレター



# ウィムxストーリーテリングin2010春

1月、ユトレヒト警察の責任者五人を対象としたトレーニングを行いました。業務の中でストーリーテリングをどう取り入れるのかを扱うこのトレーニングでは、彼らの私的なストーリー、特に一人一人が仕事に対して抱く情熱にまつわるストーリーが重要な鍵になります。なぜなら、そうしたストーリーこそが仕事の場において、人と人とを結びつける役割を果たすからです。6月には再び五人が顔をそろえ、この半年の間に職場で私的なストーリーを使った際の体験談をシェアすることになっています。

ストーリーテリング・スクール第七期生七人のトレーニングが、2月に始まりました。6月末に卒業公演が行われます。

3月には、昨年10月のマスタートレーニングコースに参加した五人が4ヶ月ぶりに再び集まりました。それぞれが職場でストーリーテリングを用いたときの体験をシェアするためです。それらはとても実りあるエピソードでした。例えば、公営住宅を管理する地方公共団体の運営委員である一人は、その運営チームが、組織の他の部署で働く人々から信頼を得ていないという問題を抱えていました。その地方では、同じオランダ国内でも他の地方から来た人間を簡単に信用しないという地域性があり、偶然にもその運営チームは、他の地方からやってきた人ばかりで構成されていたのです。昨年秋のコースを終えた彼女は、その職場において個人的なストーリーを用いはじめました。すると、他の部署で働く人々との関係性がどんどん改善され、さらには、彼らからの信頼を得ることまでできたのです。

3月19日には、語りの巡礼隊のストーリーテラー八人とアフリカンミュージシャン8人で、世界各地で祝われたストーリーテリングの日に参加しました。(本来、ストーリーテリングの日は3月20日ですが、今年はその日が土曜日で学校は休日となるため、19日に祝うことになりました。)ウィムが住む町の今年の小学校教育テーマは「Africa mon Amour! (愛するアフリカ!)」。そこで、語りの巡礼隊もこの日のテーマをアフリカに絞りました。早朝から一日かけて、語りの巡礼隊は2台のリムジン車で市内7カ所の小学校をまわりました。1500人以上の子どもたちが、校庭でアフリカの音楽とダンスを楽しみ、その直後には各教室でアフリカの物語に聴き入りました。

そして、5月23日は毎年恒例の語りの巡礼隊ツアーが開催されました。今年は五人の語り手、五人のミュージシャンと共に3会場をめぐります。テーマは「高齢者をたたえる」。高齢者、そしてその家族や周囲の人々を対象に、同じ社会に生きる高齢者にポジティブな焦点をあてる内容でした。

その他、美術館内で来訪者を案内し導くとき、ストーリーテリングをどう使うことができるのか、というトレーニング。小学校高学年の生徒およそ千人を対象にした、6週間におよぶストーリーテリングワークショップ。公共職業安定所(ハローワーク)にて求職中の人々に、ストーリーテリングを活かして職に就くチャンスをおぼすためのトレーニングなど、様々な分野で依頼を受けています。



# 日本でストーリーテリングの活動をするということ

先日、日本からこんなメールが届きました。「これからストーリーテリングの活動を日本でしようとした場合に、きっとウィムには相談に乗ってもらえるんじゃないかと思って…」

これまでウィムが来日した際にも、多くの方からこのような問いかけがありました。

オランダでは”ストーリーテリング”を耳にしたことがある人々、さらには”ストーリーテリングの重要性”を感じている人々が明らかに増えています。公演に限らず、例えば今年に入ってから、企業や警察署など様々な組織でストーリーテリングを用いるトレーニングをウィムは行っています。

しかし、日本社会ではまだ、ストーリーテリングがそこまでの広がりを見せてはいません。日本でも、永年にわたりストーリーテリング/語りの活動を幅広くしておられる方々がいいます。しかし、ストーリーテリングとは一体どういうものなのか、それを実際どこで、何のために使うことができるのかということに関して、プロフェッショナルな域ではまだ広く認知されていないとウィムは感じています。そうした今の日本社会でウィムが大事に思うのは、ストーリーを語ることを楽しむ、そして聴くことを楽しむ一まずはそれを一人でも多くの人が体験することです。

日本でストーリーテリング活動をするにあたっては、まず小さな活動から始めることをウィムはお勧めします。例えば自分の子どもに語る、子どもの友達や近隣の子どもたちを招いて自宅で活動を始める、公民館

でストーリーテリングを催す、などです。

ウィムの場合、ストーリーテリングを始めだした最初の頃、彼は近所の学校へ出向き、その学校の子どもたちにお話を語りたくて提案しました。学校側はそれを任意で了解し、二週間間に各教室で二つずつストーリーを語る企画をたてました。また、学校の体育館でストーリーテリング専用のテントを組み立て、その中で語るということも行ってきました(写真上)。その他のアイデアとして、図書館や放課後教室、誕生日会や記念日に贈り物としてストーリーテリングをすることも考えられるでしょう。

そのような活動を繰り返す中で、あるとき新聞社がウィムの活動に興味を示し、記事が掲載されることになりました。そしてその記事が発端となり、ウィムは初めてお金をいただいてストーリーテリングをする仕事を依頼されました。それはウィムが、プロのストーリーテラーとして歩むステップへと繋がっていったのです。

大切なことは、ストーリーテラーとしてキャリアを積むことを考えるならば、最初のステップとして有給無給に関わらず、一つでも数多くのストーリーテリングを可能性がある限り提供することから始めることです。(ところで、ウィムは今でも無償をベースとしたストーリーテリングをオランダで毎年行っています。それはストーリーテリングの広告活動、そしてネットワークを広める



ことにもなるのです。)

ウィムがストーリーテリング活動を小さな規模で始めることをお勧めするには、もちろん理由があります。楽しくポジティブな、確かな感覚を体験することに大切な意味があるからです。一つ一つのステップを小さくふむことで、そのように肯定的な体験を積み重ねるチャンスが増えるでしょう。大きなステップを急にふんで、もし聴き手から否定的反応を受けた場合、それが原因となって自分のストーリーテリングに大きな不安感を抱いたり、自信をなくす人々を見かけることがあります。

語る本人自身がストーリーテリングを最大限に楽しめる、そんな場所を探すことです。ストーリーテリングは、愛と喜びと楽しむ心からあふれ出てくるものです。「こうしなければいけない」という気持ちから出てくるものではありません。物語を語る人々は、ストーリーに対する愛と喜びに満ちあふれた心から語ります。それが日本の隅々に、ストーリーテリングにふさわしいエネルギー「気」を放つのです。そしてそれは、日本社会にさらなるストーリーテリングの広がりをみせるだけでなく、プロフェッショナルな域も含め、ストーリーテリングの復興へとつながっていくでしょう。

「ウィムにこれを聞いてみたい!」という方は、どうぞ語りの輪までご連絡ください。

〈語りの巡礼隊ツアーのチラシ〉

## 2010冬プログラム

12月末のウィム来日が決定しました。日程の都合上、今回は東京会場のみとなります。詳細は次号ニュースター(10月発行予定)及び語りの輪ウェブサイトにて後日お知らせいたします。お楽しみに!

## 『最も未知なるもの』

ある大きな街で、老人が骨董品店を開いていた。その店にある日、一人の旅人が入ってきて、店中に積み重ねられた骨董品の数々を見回しながら、老人と話を始めた。そして旅人は、この店で最も不思議で未知なる物は何かとたずねた。老人は、考古学的な発見物や鹿のはく製、魚や鳥の標本、その他、店中に置かれた数々の骨董品を見回した。それから、老人は旅人に向きなおって言った。「この店で最も不思議で未知なるもの、それは疑いなくこの私自身だよ。」

ご寄付のお願い

今後も語りの輪の活動を続けていくことができますよう、ご支援をどうぞよろしくお願いします。

郵便振込口座:00730-1-39874 口座名 語りの輪

銀行振込口座:北陸銀行 堀川支店(普通)5043970 口座名 語りの輪

Circle of Storytelling

Eendengang 75 7552KN Hengelo, The Netherlands

Tel: +31-74-2422696 Web: www.werder.jp Email: info@werder.jp

日本支部:〒939-8211 富山県富山市二〇町5丁目3番地14 Tel/Fax 076-422-5102

発行・編集:米屋香林 製版:De Lijn 印刷:RDS、(株)ウエーブ 配送:ヤマト運輸